

ハシボソガラス

澄川基地でカラスの仔が親におねだりする声がしていました。2012年7月31日。このあたりを縄張りにしてしばしばわれわれの隙を窺っているハシボソガラスだと分かっていました。現場写真をゲットしました。右が母親、左が仔です。父親もいましたが、画面には入りませんでした。外見だけでは親子も雌雄も区別できません。行動や仕草を観察することで、やっと区別ができるようになります。



ハシボソガラスとの付き合いの始まりは高野少年中学2年生からでした。野生の親の巣から2羽のヒナを略奪してきて、飼育したのです。飛べるようになると放し飼いにしました。段々帰宅間隔が伸びまして終には還らなくなり野生化しました。

二度目の飼育は高校2年生でした、初回同様に同じ親の巣から2度目の略奪をして、同じような経過で巣立ちしました。これが鳥好きになった要因の一つに違いありません。原点ともいべき写真をご覧ください。このカラスたちに自然への畏敬の念を育てられ、九州から未知の北海道の自然への憧れを醸成してくれたのです。

札幌のカラスはハシボソとハジブトの2種類がいて、ともども利口さについては衆知のことなので、特に述べる必要も感じません。生き物すべてに共通しますが、こちらが敵愾心をもっていなければ、相手の警戒心も薄れることは経験上確かなことです。心ばかりでなく、挨拶としての声をかけることで、より相手に伝わります。人間は生き物の中で繁栄をし過ぎていますが、人間以外の生き物に対して傲慢に過ぎてもあります。それを人間がはるかに及ばない敏感さで受け止めていると感じるのです。生きとし生けるものすべてが存在理由と存在価値があります。そういう思いで森に入ると楽しみは尽きません。毎回出会いがあり、発見があります。森ボラの日目覚めるとときめきを感じ、帰宅すると調べごとを楽しみます。自然様様、アリガト、サンキュー、スパシーバ、メルシー、グラシアス。シェーシェー。

